
One Valentine's Day

くう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One Valentine's Day

【Nコード】

N4034A

【作者名】

くう

【あらすじ】

バレンタインデー。1年に1回、毎年必ずやってくる2月14日。だけど、同じ2月14日は2度と無い。これは、1生に1度しか来ない「或るバレンタインデー」のお話です。

第0話：前の日。（前書き）

初めて小説を書いてみました：よくある内容の下手くそな話ですが、最後まで我慢強く読んでいただければ幸いです。これまた平凡な前書きですみません。

第0話：前の日。

昨日の夜 2月13日の夜

私は友達にあげるチョコ、いわゆる友チョコ作りに奮闘していた。

高校に入って新しい友達も出来、渡す予定のチョコは約2倍。私は去年ガトー・ショコラで見事に失敗した為、今年は作り慣れたブラウニーに決めた。

ミルクチョコレートと砂糖とハチミツを入れた、少し甘過ぎるであろう生地がオーブンの中で着実にブラウニーになっていく過程を時々眺めながら、私はラッピングの用意をする。

友達用に買ったクローバーのラッピング袋：10枚200円×2、
仲の良い同性の先輩には小さな紙袋：5枚200円。

そして…鳥の巣の様な細い紙付きのピンクのバスケット：500円
と、それを入れる為のチェック柄紙袋：200円。

こうやって並べると、誰が本命なのかすぐに分かっちゃうな…

私は何だか、1人あたり200円の友達と400円の先輩に申し訳なくなってしまった。

私が1人分に700円も注ぎ込んだ相手は、同じ部活の1つ上の先輩 相川先輩だった。

私は中学の時から、弓道に興味を持っていた。凜とした姿勢、弓独特の形状にも惹かれた。田舎の小さな中学にはそんな部は無く、高校へ入学してから初めて弓に触れた。見学したその日に入部し、下手なりに楽しく部活をしている。

相川先輩は、弓道部の男子副部長だ。私は最初、同級生や女子の先輩の名前を覚えるので精一杯で、男子の先輩の名前を覚える暇がなかった。また、一緒に練習するものの、こちらは入部したてで学年も性別も違うので話もしなかった。

2か月ほどして、私も部活にだいぶ慣れた頃だった。

私が初めての遠征へ行った時、ホテルで荷物を運んでいて、途中で遅れてしまい焦って転んでしまった。

すると、横からぬつと現れた大きな手。

相川先輩だった。先輩は私の腕は掴んでくれなかったが、転んだ拍子に床に投げ出された荷物を運んでくれた。少し驚きながら

「ありがとうございます」

と言うと、先輩は何も言わずに部屋に行ってしまった。

それだけ。それだけだった。そんなありきたり過ぎるきつかけで、その日から私は先輩から目が離せなくなってしまったのだ。

私が1人で先輩の事を思い出している間に、ブラウニーは既に焼き上がっていた。しまった。コーティング用チョコをまだ溶かしてなかった。

急いでレンジで温め、切ったブラウニーの表面に、溶けたコーティングチョコをかけ、アーモンドを適当に散らす。

1つ味見をしてみた。ビターチョコで作った方が良かったかな、と感じたが、出来は悪くないと思う。

これなら、先輩に渡しても大丈夫だろう。

ふとそんな事を思つて、ああ私は渡す勇氣も無いクセに……と1人でつぶやく。

そう。私には、綺麗なラッピング用品とそこそこ出来のいいブラウニーがあつても、1番大切な物が揃つてなかったのだ。

第0話：前の日。（後書き）

もしよろしければ、感想を教えてください。けちよんけちよんにして
もらっても結構です（笑）

第1話：2月14日の友達。（前書き）

第0話でギブアップしないでこれを読んで下さる皆さん、ありがとうございます！！それでは第1話をどうぞ。

第1話：2月14日の友達。

「おっはよ、綾子！先輩に渡すチョコはちゃんと持ってきた？？おいしいの出来た？？私はも〜大変だったんだよ〜、生チョコ作ってたら、途中で生クリームの量間違えちゃって作り直してさあ、今朝の2時までかかったちゃってえ…ふああ…」

私が教室に入った途端に駆け寄って来て、一息で喋り続けた祢々（ねね）の話が、大きな欠伸でようやく中断した。

2月14日、午前8時20分。私は結局、一応包むだけ包んだ本命ブラウニーを鞆に忍ばせ、電車で片道45分の学校に登校していた。

「うん、一応持ってきたよ。渡せるかどうか分かんないけど。」

「え〜、折角のバレンタインなんだからさあ、頑張ろうよあー！」

祢々がぷうと頬を膨らませて言ったので、私は思わず笑ってしまった。

祢々は、高校へ入ってから私が一番初めに話した友達だ。もともと積極的でない私は、同じ中学からの知り合いがこのクラス：1-Eにはいなかった為、入学式の日には1人でぼんやりと出席番号順に並べられた教室の机に座っていた。

その時、後ろの席から肩を叩いて、

「初めましてえ〜、岩崎祢々でえすっ！！井上…綾子ちゃん？？よろしくねえ！！」

いきなり教室中に響き渡る様な声で話し掛けて来たのが、岩崎祢々だ。

もちろんその声のボリュームは、今でも全く変わっていない。

私は笑いながら自分の話題を流して尋ねる。

「ねえ、祢々はちゃんと秋くに渡すチョコ持って来た??」

「当たり前じゃん、ラッピング超気合い入れたんだからあ!!」

ほらね、あの時と同じ、騒々しい朝の教室でもよく響く声。

「見て見てえ!! ラメ入りだったから目立つかなって思ったんだけど...どう??」

そう言いながら祢々が鞆から引つ張り出したオレンジのラメ入り包み紙は、いつも音楽好き（要するにバンドメンバー）男子グループの中心で騒いでいる倉木秋^{しゅう}にぴったりだ。

「秋くにぴったりじゃない?? 祢々はよく秋くんを観てるんだね...」

「へへ...だって好きだし!!」

好きだし!!...なんて素直なんだろ。私にも親友の前だけでも、堂々とそう宣言出来る可愛らしさがあれば良いんだけど。

「でも、いつ渡そうかなあ... あっ!! 今日全校朝礼じゃない?? 持ってってみようかなあ。よしっ、行くぞあ、綾子!!」

決断の早さも行動力も、私には無い憧れの部分。でも、そんなに大きな包み紙、どうやって隠して持つて行くの?? と私が訊く前に、彼女は私を置いて、既に走り出していた。

第1話：2月14日の友達。（後書き）

第1話、どうでしたか？ 次回は朝礼でのお話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4034a/>

One Valentine's Day

2010年12月14日21時08分発行